歳晩　三首

嘉祐七年（一〇六二）二十七歳 鳳翔で迎えた除夕の作。

饐歳、別歳、守歳 三首のうち別歳の一首を録す。

歳晩　相與饐問爲饐歳　酒食相邀呼爲別歳　至除夜　達旦不眠爲守歳
蜀之風俗如是　余官於岐下　歳暮思歸　而不可得　故爲此三詩　寄子由

歳晩　相與に饐問するを饐歳と為す　酒食相邀呼するを別歳と為す　除夜に至り　旦に達して眠らざるを守歳と為す。
蜀の風俗是の如し　余 岐下に官し　歳暮歸を思ひ　而も得べからず
故に此の三詩を為り　子由に寄す。

【饐歳　其一】

饐とはおくりもの。第一首の饐歳は、「田畑のしごともおしまいにして、みんな年の暮れを楽しもうと、金をおしまず買物をする。盤によこたえられた大きな鯉、籠に入れた二羽のうさぎ、金持ちが五色の絹糸で縫い取りした織物をもちこんで、一座の人の眼をくらませるかと思えば、貧者は、うすひきなどして得た賃銭で心ばかりの贈物をととのえる。故郷の蜀地では今年も今頃そんな行事が行われていることだろう。鳳翔府の官吏生活では友人もなく、郷里の風習も行なえず、あたら佳節は過ぎてしまい、詩を作っても唱和してくれる人もいないと」とうたう。

別歳（べっさい）　其二

1 故人適千里
2 臨別尚遲遲
3 人行猶可復
4 歳行那可追
5 問歳安所之
6 遠在天一涯
7 已逐東流水
8 赴海歸無時
9 東鄰酒初熟
10 西舍彘亦肥
11 且爲一日歡
12 慰此窮年悲
13 勿嗟舊歳別
14 行與新歳辭
15 去去勿回顧
16 還君老與衰

故人 千里に適（ゆ）く
別（わかれ）に臨みて 尚（な）ほ遲遲たり
人の行（ゆ）くは 猶ほ復（かへ）る可（べ）し
歳（とし）の行（ゆ）くは 那（なん）ぞ追ふ可（べ）けん
歳（さい）に問ふ 安（いづく）にか之（ゆ）く所ぞ
遠く天の一涯に在り
已に東流の水 を逐（お）ひ
海に赴（おもむ）いて 帰る時なし
東鄰 酒 初めて熟し
西舎 彘（てい） 亦た肥ゆ
且（しばら）く一日の歓（かん）を為し
此の窮年（きゅうねん）の悲しみを慰（なぐさ）めむ
嗟（さ）する勿（なか）れ 旧歳の別（わかれ）
行々（ゆくゆく）新歳と辞せん
去々（きょきょ） 回顧（かいこ）する勿（なか）れ
君に 老（ろう）と衰（すい） を還（かえ）さん

【語釈】

邀呼…むかえ招く。**岐下**…岐山のむもと。鳳翔府をいう。**適千里**…荘子の逍遥遊に「千里に適く者は、三月糧を聚む」とある。**安所之**…ゆくところはどこか、の意。杜甫の旅夜書懐に「飄飄何所似」（飄飄何んの似たる所ぞ）とある。（何所似は似ているものはなにか＝なにに似ているだろうか）の意。所～は、そのところ、そのこと、と指し示す。所之とは、ゆくそのところ、所似とは、似ているそのもの。**遠在天一涯**…古詩十九首第一首に「行き行く重ねて行き行く、各おの天の一涯に在り」とある。**東流水**…百川東流ということばがあるように、中国の川は東流して海へ注ぐ。**彘**…豕。こぶた。**東鄰～ 西舎～**…おとなりの酒や豚をあてにしているようであるが、序にいう「酒食 相邀呼する」ごちそうをつくって招待しあう。**且**…しばらく。まあそれはともかく、というきもち。**勿嗟**…勿は禁止のことば。しかし、…するなというよりも、……しないでおこう、……しないようにしよう、というきもち。論語の「過ちては則ち改むるに憚ること勿れ」の勿である。去去…どんどんいってしまう。古詩十九首の「行行重行行」などと同じ。

【通釈】

友人が遠い旅にのぼるとき、いよいよ別れぎわになってもなお歩みは遅々としてはかどらないものだ。しかし 人は旅立っていっても帰って来れるのに、年が行ってしまうのはどうして追っかけることができよう。年よ、あなたにおたずねする。「いったいどこへ行くのです？」「それは遠い遠い大空の彼方なのです。一旦あの東へ東へと流れる川の流れにのって、大海原へ出たら最後、もう帰って来ることはないのですよ」

東がわのお隣ではちょうどお酒がうまくかもせたところだろう。西がわのうちの豚小屋に子豚が丸々太ったことだろう。ともかく酒肴をそろえて一日の歓を尽くし、このおし迫った年の瀬の悲しみを慰めようではないか。古い年との別れをなげくまい。いずれ新しい年とも別れる時が来るのだ。年よ、あなたはどんどん去って行って、あとを振り返りなさるな。君に老いと衰えとをお返しするから、さっさと持って行ってくれたまえ 。

「蘇軾」近藤光男より抄出